

音楽的な感受をもとに、豊かに音楽表現し、聴き味わう生徒の育成

○立花 健祐

1 研究主題設定の理由

音・音楽そのものの魅力と、その音楽を取り巻く文化的・社会的・歴史的背景の両面から音楽と向き合い、個と集団での活動を往還させたり、感動体験や成功体験を積み重ねたりすることで生徒の感性はより豊かになり、音楽の価値が個に応じて認識されていく。また、音楽文化についての理解を深めていくことは、音楽のよさや美しさを味わい、心を豊かにしていく基盤となるものである。

そのうえで、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、汎用的に用いることができる知識・技能や考え方を身に付け、活用していくことが豊かな音楽表現、深い聴取につながると考える。音楽は集団で成し遂げるものが多いため、人と人とのつながりを醸成するよい機会と捉えることもできる。

これらのことから、ウェルビーイングの4つの因子(やってみよう因子・ありがとう因子・なんとかなる因子・ありのまま因子)は学校の音楽教育活動によって獲得され得るものと考え、感動体験や成功体験を積み重ねて主体的に活動に取り組む生徒の育成を目指し、音楽科の研究主題を設定した。

2 音楽科で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
○曲想と音楽の構造・背景との関わり、多様性について理解する力 ○創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能	○音楽表現を創意工夫したり、音楽のよさや美しさを味わって聴いたりする力	○音楽を愛好する心情 ○音楽に対する感性と親しんでいく態度 ○美的情操を中核とする豊かな情操

3 研究内容

視点① 個別最適な学びと協働的な学び

(1)音楽経験の有無や得手不得手にとらわれずに学習できる題材計画と課題設定

音楽活動が苦手な生徒にも興味を喚起することが必要である。「知りたい」「やってみよう」と思わせる導入と、音楽活動での成功体験の積み重ねを通し、主体的に学習に取り組もうとする力を養っていききたい。

(2)新たな音や音楽との出会い、個の活動と集団での活動を通し、感性を磨く場面の設定

実際の生演奏に勝る音楽はないとは考えるが、場合によっては ICT を活用して個人が鑑賞したい部分を繰り返して鑑賞する、全体で鑑賞するなど、必要に応じて活動方法を検討する。個や集団でより深く味わい、その思いを共有する場を設け、様々な感じ方や表現の仕方に触れる機会を増やす。また、表現と鑑賞を往還させながら学習することを通して、音楽表現の幅を広げたり、より深く音楽のよさや美しさを味わったりする活動につなげ、感性を磨いていきたい。

視点② 教科等横断的資質・能力の育成

(1)音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図った対話を充実させる。

「音楽的な見方・考え方」が働くように、試行錯誤しながら表現方法を見いだしたり、音楽のよさや美しさを味わったりするなかで、その「見方・考え方」をもとに音楽科の特質に応じた対話が行えるよう、マネジメントやファシリテートに努める。

(2)文化的、歴史的背景をもつ題材を通し、他の音楽文化や多様性の理解を図る。

作曲者の思い、当時の時代背景や文化的背景を含む様々な要素にも触れながら、楽曲に浸ることができるように教材研究を行う。我が国の民謡、アジアの民族音楽、世界の音楽なども取り上げ、様々な音楽に触れる経験を通し、固有性と多様性の大切さに気付けるようにしていきたい。

視点③ 評価の充実

生徒自身が学びを振り返ることができるよう、音楽表現を創意工夫したり音楽のよさや美しさを味わったりするための手立てを検討する。そのために、題材や本時の授業を通して身に付けたいゴールの姿を明確化するとともに、生徒とも共有し合いながら適宜、学習状況を振り返る場面を設定し、音楽に親しみながら豊かな心を育む。